

ローマ人への手紙6章1-5節 「イエスと共に死に、イエスと共に生きる」

1A 罪に対して死んだ者 1-2

1B 放縦の生活 1

2B 罪の生活との分離 2

2A キリスト・イエスにつくバプテスマ 3-5

1B 死にあずかるバプテスマ 3

2B 死ぬことによる新しいいのち 4

3B キリストの復活 5

は

本文

ローマ人への手紙 6 章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、5 章までできていましたが、今朝は、初めの 5 節に注目します。「¹ それでは、どのように言うべきでしょうか。恵みが増し加わるために、私たちは罪にとどまるべきでしょうか。² 決してそんなことはありません。罪に対して死んだ私たちが、どうしてなおも罪のうちに生きていられるでしょうか。³ それとも、あなたがたは知らないのですか。キリスト・イエスにつくバプテスマを受けた私たちはみな、その死にあずかるバプテスマを受けたのではありませんか。⁴ 私たちは、キリストの死にあずかるバプテスマによって、キリストとともに葬られたのです。それは、ちょうどキリストが御父の栄光によって死者の中からよみがえられたように、私たちも、新しいいのちに歩むためです。⁵ 私たちがキリストの死と同じようになって、キリストと一つになっているなら、キリストの復活とも同じようになるからです。」

私たちは前回、パウロがローマ人への手紙で、新しい内容に移ったところを見ました。それは、私たち人間には、二つの支配があるのだということです。アダムから入ってきた、罪と死の支配。そしてキリストから入ってきた、義といのちの支配があります。そこで大事なのは、自分はどちらにいますのか？ということです。アダムについているのか？キリストについているのか？ということです。キリストの下にいるならば、その恵みが支配します。アダムの下にいるならば、罪と死の力が働くということです。けれども、福音があります。それは、イエスを心から信じ受け入れ、従っているならば、自分はもはやアダムの人ではなく、キリストの人になっているということです！だから、罪と死の支配と力から解放されているということです。

福音、良き知らせについてもう一度、それが何であるかを思い出してください。「1:16 福音は、ユダヤ人をはじめギリシア人にも、信じるすべての人に救いをもたらす神の力です。」福音は、力と支配の問題です。今、自分が神から罪なき者とみなされて、正しい者とみなされているのも福音です。また、将来、神の怒りから救われることも福音です。けれども今、自分が罪の支配から自由にされている、罪を犯さなくてもよい自由も得ているというのも、福音なのです。イエス様は、「ヨハ

8:36 子があなたがたを自由にするなら、あなたがたは本当に自由なのです。」と言われました。罪を犯すしかないという、罪の奴隷から自由にされて、神のものとされたということです。ですから、救われるとは、単に地獄に行かずに済んだということだけではありません。事実、罪から解放されている生活を送ることができるという希望も救いなのです。

1A 罪に対して死んだ者 1-2

1B 放縦の生活 1

¹ それでは、どのように言うべきでしょうか。恵みが増し加わるために、私たちは罪にとどまるべきでしょうか。

パウロは5章の終わりで、大胆にこう宣言しています。「5:20 罪の増し加わるところに、恵みも満ちあふれました。」私たちがどんなに罪を犯していたとしても、すべての違反を神はお赦しになり、私たちが悔い改め、キリストを信じる信仰によって義と認められるのです。そこで、パウロは予測される疑問を自ら問いかけています。罪を犯したら神は赦されて、恵みが増し加わるのだから、もっと罪にいたらいいいですね、という問いかけです。

パウロは恵みの福音を語る中で、そういった中傷を受けていたことを前に話しています(3:8)。決してそうではないことを彼は語っています。けれども、神の恵みを放縦に変える人々は、実際にいたようです。ペテロが愛する兄弟パウロの手紙について言及して、彼は決してそんなことを教えていないけれども、歪曲して不道德な生活をしている人々について戒めています(Ⅱペテ 3:16-17)。パウロ自身もピリピ3章で、「彼らは欲望を神とし、恥ずべきものを栄光として、地上のことだけを考える者たちです。(19節)」と警告しています。罪の生活をしているけれども、教会に来たら赦されるからとして、そしてそこで赦されたら、もっと罪を犯す生活を次の週も過ごすということです。そうすれば、神の恵みのすばらしさをもっともっと分かるとするものです。

2B 罪の生活との分離 2

そういった主張や行いに対して、パウロは2節でこう言っています。「^{2a} 決してそんなことはありません。」これは、「そんな考えは、滅んでしまえ！」と言っている、最も強い否定表現です。そんなことは断じてないと断言しています。恵みの下にいることは、罪の中に生きることを推奨していないどころか、全く正反対だということをパウロは話していきます。律法の下ではなく恵みの下にいるからこそ、罪から離れた生活の中に入ることができる、というのが彼の主張なのです。私たちが時々、思いませんか？「あまり恵みを強調されると、自分は罪を犯してもいいんだと思ってしまう。」いいえ、「恵みを本当に知った時から、罪から自由になり、解放される」のです。

^{2b} 罪に対して死んだ私たちが、どうしてなおも罪のうちに生きていられるのでしょうか。

パウロは、罪と死の支配から、義といのちの支配に移ったことを話しましたね？つまり、義と死の支配に移った者たちは、罪と死の支配からはおさらばしているのです。もう関わりがなくなったのです。それを、「罪に対して死んだ」と言っています。罪の支配と力から自由にされていて、罪の生活を送っている自分はもう死んだのだ、ということです。だから、罪の生活をそのまま送っていくことはできない、と言っているのです。罪が死んだ、とか、罪がなくなったということではありません。「罪に対して死んだ」と言っています。あくまでも、「罪に支配された生活に終わりを告げた」ということなのです。

パウロは、別の言葉で、この変化を次のように言っています。「Ⅱコリ 5:17 ですから、だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。」キリストの内にある者は新しく造られました。古いものは過ぎ去りました。この、「古いものは過ぎ去った」というのが、「罪に対して死んだ」ということです。

カルバリーチャペルの牧師に、「ラウル・リース」という人がいます。彼は、高校生の時に取っ組み合いの喧嘩をしたため、放校処分となりました。彼には怒りの問題がありました。怒りを抑えることができませんでした。そして、人を傷つけることが快感になっていたそうです。それで、ついに捕まって、裁判官に、「そんなに戦いたいなら、海兵隊に入れ。さもなくば刑務所行きだ。」と言われました。彼は海兵隊に入隊し、格闘技を学び、ベトナム戦争に派遣されました。そこで彼は、人を殺し始めました。彼は人を殺すのに飢え渴きまで感じたのです。それで周りの仲間がかえって心配して、最前線から彼を引き離しました。その後もあまりにも暴力的なので除隊にされます。

ラウルは帰国後、結婚して子供を生み、人を傷つけることを教えるため、カンフー道場を開きました。大繁盛したそうです。けれども奥さんに暴力をふるい始め、奥さんが家出する準備をしました。ラウルが戻ってきた時に、荷物がまとめられているので、「行かせるものか、帰ってきたら殺してやる。」と思って、散弾銃に弾を込め、椅子に座って彼女が戻って来るのを待っていました。暇つぶしにテレビをつけました。すると、そこにチャック・スミスが映っていたのです。神の愛について、神が罪を赦されることについて語っていました。その場で彼はひざまずき、罪の赦しを請う祈りをテレビ画面の前でささげました。奥さんが家に戻ると、彼は「殺したりしない、お前を愛しているよ。」と言いました。奥さんは、彼は酔っぱらっているに違いないと思ったそうです。彼の変化を信じるまで、一年ぐらいかかったそうです。

そしてラウルは、自分の母校の高校に戻りました。聖書を開いて、聖書を読んで行ったのです。校長が、ラウルが校内にいるのを見つけて、警察を呼びました。機動隊が来ました！彼を拘束しようとしたら、ラウルは「何ですか？」と答えると、「お前の魂胆は分かっている。問題を起こしに来たな！」と言ったのです。その時にラウルは答えました。「俺は、もうあのラウルではない。あれは、古いラウルだ。あいつは死んだ。俺は、新しくなったラウルだ。俺は、キリストにあった新しく造られ

た者だ。」ということです。古いラウルは死んだ、新しい人になったのだ、と言ったのです。彼は、神の愛に出会い、罪の赦しを得て、怒りに満ちた自分の生活は終わったのだ、死んだのだとみなしたのです。そして、新しい人になったのだと知って、それに従って生きて行ったのです。

2A キリスト・イエスにつくバプテスマ 3-5

1B 死にあずかるバプテスマ 3

そこでパウロは、「罪に対して死んでいる」ということを、信じて受けるバプテスマによく表れていることを話し始めます。

3それとも、あなたがたは知らないのですか。キリスト・イエスにつくバプテスマを受けた私たちはみな、その死にあずかるバプテスマを受けたではありませんか。

イエス様は、ご自分が公に活動を始められるにあたって、ヨハネからバプテスマを受けられました。そして、使徒たちに、バプテスマを授けてご自身の弟子としていくように命じられました。「マルコ 16:16 信じてバプテスマを授ける者は救われます。しかし、信じない者は罪に定められます。」と言われました。バプテスマを受けることによって救われるのではないですが、信じることを水のバプテスマを受けることによって明らかにするのです。

バプテスマは、元々、ユダヤ人の水の洗いの儀式の中にありました。ミクヴェと言いますが、小さな水深のある浴槽のようになっていて、階段もあります。そこに、全身裸で入るのです。そして、頭まで水に浸かります。そこから出て来て、新たに生まれたことを表します。ユダヤ教に改宗するには必要な儀式です。その水は、母の胎を表していて、再び母の胎に入り生まれるということ、つまり、自分自身が全く新しくされたことを意味しているのです。

そこでイエス様は、ご自分の名によってバプテスマを授けるように弟子たちに命令されました。バプテスマといっても、何につくバプテスマなのか？その水が何を意味しているのか？が大事です。聖餐式で、パンとぶどう酒にあずかりますが、ユダヤ人たちはいつもパンを食べ、ぶどう酒を飲んでいいますから、何のために食べているのかが大事なんですね。イエス様は、パンはご自分の体、ぶどう酒は、ご自分が流される血を表しているとしました。水のバプテスマも同じです。「**その死にあずかるバプテスマを受けた**」と言っています。

キリストを信じるというのは、キリストにつくことです。この方に結ばれることです。この方の下にいて、この方の影響力の中に生きます。イエスの御名によるバプテスマは、イエス・キリストが死なれて、葬られて、そしてよみがえられたことに自分が結ばれていることを示すものです。先に、ユダヤ人の水の洗いの儀式は、その水が母の胎を表すといいましたが、そのように新しく生まれるだけでなく、さらに、墓を表していることとなります。死んで葬られて、よみがえるところの墓です。水

の中に入るのは、罪に支配された人がキリストと共に死ぬことを意味します。

私たちは、自分自身が、その古い人がキリストにあって死んだとみなすのです。「コロ 3:3 あなたがたはすでに死んでいて、あなたがたのいのちは、キリストとともに神のうちに隠されているからです。」私が、若い牧師や伝道師の中で交わった時に、「北斗の拳のセリフ、説教の中でよく使うんだよ」と言ったら、苦笑していました。北斗の拳の主人公、ケンシロウが、アチャチャチャー！と相手を拳で打つのですが、その後で「お前はもう死んでいる」というのです。まだ生きているんですよ、でも、もう死んでいるというのです。初めは理解できずにいますが、たちまち体内から破滅が起こり、肉体が破壊され、爆死するようになってしまいます。

ローマ人への手紙で、私たちはこのことを学びました。自分のうちには良いものがない、自分のうちに救われることができるものがない、善がないということ学びました。ですから、肉体は生きていても、実は霊的にはすでに死んでいるのです。ですから、この死ぬべき体を生かそうとすることをあきらめ、キリストにいのちをかけ、この方信じの信仰によって生きるのです。「ガラ 2:19b-20 しかし私は、神に生きるために、律法によって律法に死にました。私はキリストとともに十字架につけられました。20 もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。今私が肉において生きているいのちは、私を愛し、私のためにご自分を与えてくださった、神の御子に対する信仰によるのです。」

聖書の中に、自分に死ねなかった人々が出てきます。その一人で典型的なのが、金持ちの青年です。どのようにしたら永遠の命を得られるのか？とイエス様に尋ねました。そして、十戒の中の戒めを、幼い時から守ってきたと言いました。ところが、自分の財産を貧しい人たちに分け与えなさいと言われたら、彼は悲しい顔つきで去って行ったのです。彼は戒めは守っていたつもりですが、まだ自分に死ぬことができていなかったのです。イエス様は弟子たちに、「マル 10:25 金持ちが神の国に入るよりは、らくだが針の穴を通るほうが易しいのです。」らくだが針の穴を通る方がやさしいと言われています。いわゆる、日本語でも「これは、死ななきゃ直らない」という言い回しがありますね。まさにそれです。死なないと直らない、新しく生まれないと、義の中で生きていくことはできないのです。

しかし、そのことをイエス様は私たちの代わりに行ってくださいました。死なれて、葬られました。イエスを信じる者はこの方に結ばれて、この方とともに死んで、葬られたのです。

2B 死ぬことによる新しいいのち 4

⁴私たちは、キリストの死にあずかるバプテスマによって、キリストとともに葬られたのです。それは、ちょうどキリストが御父の栄光によって死者の中からよみがえられたように、私たちも、新しいいのちに歩むためです。

死んで、葬られることによって、初めてよみがえることができます。イエス様は、死にかけて、それで蘇生して生きたわけではありません。死んで葬られました。死んだというのも、確かな証拠がないといけません。もしかしたら息が続いているかもしれません。それでローマ兵は、確かに死んでいることを確認するために、囚人たちのすねを折るのですが、彼らはすでに主が死んでおられたので、折らなかったのです。けれども、わき腹に槍を指して、確実に死んでいるようにしました。そして葬られて三日経ったのです。イエスが墓から出てこられたのは、ゆえに、死者の中からよみがえったということに他なりません。

死ぬことによって、初めて生きることができます。生きたままでは、新しい命は現れません。イエス様は、「ヨハ 12:24 まことに、まことに、あなたがたに言います。一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままです。しかし、死ぬなら、豊かな実を結びます。」と言われました。種が種のままだと命はありません。地面に落ちないと発芽することなく、実が結ばれません。主は死なれることによって、初めてよみがえり、よみがえられたことによって、信じる者たちにいのちを与えられました。この方につく者も、罪に対して死んだことによって、初めて生きることができます。

日本人の死生観には、「死」そのものを否定するというのがあります。死んでも霊はそこにいると思っています。死んでもその人はまだ生きている。だから、本当の意味で死んだとみなさず、まだ生きているのだと思っています。戦前の知識人は、おそらくすべての人が聖書を読んだことがあります。十字架までは理解したでしょう。しかし、復活はもう受け入れがたいものでした。彼らはこの世に希望を見いだせず、自殺した人々が多いです。本当の意味で死ぬということが受け入れられないのです。

しかし、人は死ぬことによって、新しいいのちを見つけます。東日本大震災で、私たちの教会が出来上がったばかりの時に何度となく救援旅行に行ったことはお分かちしたと思います。宮城県の東松島市の月浜は、救援先の場所としてしばしば行ったところでした。その地区の区長からいろいろな話を聞きました。実は私は津波の前に、地元なので、家族で宿泊したことがあり、民宿の集落をよく覚えていましたが、その区画は江戸時代になされたものだそうです。なぜかというと、津波の被害があったから。すべてが取り去られて、それで新しい村創りをすることができたのです。今回も、ですから、すべてが取り去られましたが、そこから新たな村おこしができるということを含んでおられました。

イエス様が、この復活の原則について、「いのちを失う者がいのちを得る」と言われて説明されました。「マル 8:35 自分のいのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしと福音のためにいのちを失う者は、それを救うのです。」私は、抑鬱だったところから信仰を持って癒されたという証を持っています。信仰告白をしてから、一年ぐらいは、自殺願望のようなものは残っていました。けれども、ある時に、自分のこの病を治そうとするのをあきらめようと思いました。主の前でこう祈ったん

です。「自分はどうしようもないものです。塵あくたにすぎません。この塵あくたにすぎない状態で、そのままあなたにお献げします。あなたがこのどうしようもない状態をお用ください。」そうしたら、何が起こったかといいますと、治ってしまったのです！そこでこの御言葉の通りになったと分かりました。「自分のいのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしと福音のためにいのちを失う者は、それを救う」のです。

このようにして、新しいいのちにあって生きるようになりました。ここに「**新しいいのちに歩む**」とあります。イエスにある新しいいのちを、自分がいただいているので、そのいのちにあって歩むのです。「エペ 4:22-24 その教えとは、あなたがたの以前の生活について言えば、人を欺く情欲によって腐敗していく古い人を、あなたがたが脱ぎ捨てること、²³ また、あなたがたが霊と心において新しくされ続け、²⁴ 真理に基づく義と聖をもって、神にかたどり造られた新しい人を着ることでした。」ちょうどこれは、着物にたとえています。罪に支配された古い人は脱ぎ捨て、義と聖によって神にかたどり造られた新しい人を見に付けます。もうすでに、新しい人に変えられているので、その新しい性質に基づいて自分の習慣を変えるのです。

私が信じて間もない時に、私を教えてくださいました宣教師の人が、お風呂上りにパンツをどちらの足から入れるか？と聞きました。私は右からと答えたのでしょうか、今度、反対の足から入れてみて、ということです。これは難しいですね、あまりにも無意識に足を入れていきますから、その時に反対の足からパンツに足を入れるとは不自然です。けれども、慣れれば新しい習慣として身に尽きますね。それに似ています。キリスト者は、キリストのいのちにあって新しくされたものです。それを歩みの中で生きていく時は、古い習慣を脱ぎ捨てて、新しい習慣を身に着けます。

3B キリストの復活 5

⁵ 私たちがキリストの死と同じようになって、キリストと一つになっているなら、キリストの復活とも同じようになるからです。

バプテスマを受ける時、水の中に入り、全身が水に浸されます。そして起き上がります。これは、イエス様が墓に葬られているけれど、そこから出て来たことを表しています。そのイエス様に自分が結ばれていることを示しています。

一つは、霊的に新しい歩みができることを、4 節で観ました。このことについてパウロはじっくりと話していきますが、8 章の前半にかけて話していきます。11 節にこうあります。「8:11 イエスを死者の中からよみがえらせた方の御霊が、あなたがたのうちに住んでおられるなら、キリストを死者の中からよみがえらせた方は、あなたがたのうちに住んでおられるご自分の御霊によって、あなたがたの死ぬべきからだも生かしてくださいませ。」私たちのからだはもちろん生きています。けれども、パウロはここで「死ぬべきからだ」と言っていますね。罪を宿して、いつか朽ちていく死ぬ

べきからだです。しかし、そのからだを内に住まわれる御霊が、生かしてくださるのです。

私たちが、自分はキリストと共に死んでいるとみなし、よみがえられたキリストを信じる信仰によって生きる時に、自分ではなく、内におられるキリストが生きてくださるのです。ですから、だれかにほめられたとします。「あなたは、素晴らしい人ですね。」そういわれても、「いいえ、そんなことはありません。」という謙遜よりも、「いいえ、イエス様がしてくださったんです。」と心底から思いますね。自分じゃないって、分かっているのは自分自身なんです！

そして、ここの「**キリストの復活とも同じようになる**」というのは、肉体の復活をも含みます。霊的に新しくされただけでなく、将来、新しい、キリストに似たからだを与えられるのです。イエス様は、「ヨハ 11:25 わたしはよみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は死んでも生きるのです。」と言われました。私たちの体は、いつか朽ちていきます。それは罪と死の原理がこのからだには働いているからです。けれども、主は死んでも、生き返るようにしてくださいます。なぜなら、私たちはキリストに結ばれたからです。この方の下にいるからです。義といのちの支配が、キリストにあって広がっているからです。この方の力が働いていて、御霊によって罪の力に打ち勝ち、かつこのからだは死んでもそれでもよみがえらせる力が働いています。